千葉体育学研究,16,115-119,1993

<資料>

女子サッカーの試合におけるインプレーに関する研究
―第１３回全日本女子サッカー選手権大会から―

渡辺貫二[1]　芦原正紀[2]

[1]国際学院埼玉短期大学　[2]湘南工科大学

A Research on In-Play at Women's Soccer Games

Kanji WATANABE[1] and Masanori ASHIWARA[2]

[1]Kokusai Gakuin Saitama Junior College　[2]Shonan Engineering University

Ⅰ．目　的

男子のサッカー界ではプロ・リーグの発足を控えて何かと話題も多く，楽しみなことであるが，女子のサッカー界も第１３回全日本女子サッカー選手権大会を迎え，一般の人々の関心も高まってきている。サッカーの技術・戦術の向上とともに，１９９１年には世界女子サッカー選手権大会にも出場し，予選リーグではアジアの代表として世界に日本の力をアピールできたのではないだろうか。近年女子のサッカー人口も増え，各種大会も各地で活発に開かれるようになってきた。また，第４回を迎える女子の日本リーグも外国選手を補強して内容的にもかなり盛り上がりをみせている。

そこで，現在日本の女子サッカー界では最強の試合である第１３回全日本女子サッカー選手権大会の準決勝二試合と決勝のゲームについて，インプレー及びアウトオブプレーの時間と回数を記録することにより，観戦する立場から見た試合のおもしろさの追求と現在サッカー界で注文をつけられているプレーの連続性と試合運び等の内容について検討を加えてみた。

Ⅱ．方　法

調査の対象となった試合は，第１３回全日本女子サッカー選手権大会準決勝戦である（平成４年３月２５日西が丘サッカー場）「鈴与清水ＦＣラブリーレディース」対「プリマハムＦＣくノ一」及び「読売サッカークラブ女子ベレーザ」対「日産ＦＣレディース」の二試合，並びに決勝戦である（平成４年３月２６日）「読売サッカークラブ女子ベレーザ」対「鈴与清水ＦＣラブリーレディース」の計三試合である。試合内容は，VIDEO CAMERA RECORDER CD-TR55NTSCで録画し，インプレー及びアウトオブプレーの時間とその原因を分析した。

Ⅲ．結　果

１．各試合の総試合時間

表１に示すように，準決勝第一試合は８２分１秒（前半４０分１６秒，後半４１分４５秒）であった。同様に，準決勝第二試合は８１分２２秒（前半４０分１１秒，後半４１分１１秒），決勝は１０６分１０秒（前・後半および延長戦前・後半）であった。

２．各試合のインプレー時間

(a)準決勝第一試合

表１に示すように，４７分３８秒（総試合時間の５８．１％），前半２８分６秒（６９．９％），後半２２分５０秒（５５．４％）であった。また，１回のインプレー時間は平均２５．３秒で，前半２７．３秒，後半２３．５秒であった。１回のインプレー時間を１～１０秒，１１～２０秒，２１～３０秒，３１～６０秒，更に６１秒以上の各段階に総試合時間に占める割合を表わしたのが表２である。準決勝第一試合においては，それぞれ３７．４％，２３．５％，１０．４％，１７．４％，

１１．３％で３０秒以内が総試合時間の７１．３％を占めていた。６１秒を越えるプレーは総試合時間の１１．３％で，最高は前半に記録した１３８．１秒であった。

(b)準決勝第二試合

表１に示すように，５０分５６秒（総試合時間の６２．６％），前半２８分６秒（６９．９％），後半２２分５０秒（５５．４％）であった。また，１回当たりのインプレー時間は平均２４．１秒で，前半は２９．１秒，後半は１９．９秒であった。表２に示した時間別の割合では，それぞれ４０．９％，１７．３％，１５．０％，１８．９％，７．９％で３０秒以内が総試合時間の７３．２％を占め，６１秒を越えるプレーは７．９％であった。最高は前半に記録した２２６．７秒であった。

(c)決勝戦

表１に示すように，５４分２７秒（総試合時間の５１．３％）で，前半２０分９秒（４９．１％），後半２４分１２秒（５６．１％），延長戦前半４分４３秒（４４．２％），延長戦後半５分２３秒（４７．４％）となり，準決勝の二試合は総試合時間に対して約６０％がインプレー時間だったが，決勝戦は約半分しかインプレー時間がなかった。また，１回のインプレー時間は平均１９．０秒で，前半１６．３秒，後半２６．９秒，延長戦前半１５．７秒，延長戦後半１２．４秒であった。

表２の時間別の割合では，それぞれ４８．３％，２５．９％，１０．９％，９．２％，５．７％で３０秒以内が総試合時間の８５．１％を占め，６１秒を越えるプレーは５．７％であった。最高は後半に記録した１４０．９秒であった。

３．各試合のアウトオブプレー時間

(a)準決勝第一試合

表１に示すように，３４分２３秒（総試合時間の４１．９％）で，前半１６分９秒（４０．１％），後半１８分１４秒（４３．７％）であった。また，１回当たりの時間は平均１８．３秒，前半１８．３秒，後半１８．２秒であった。表２に示すとおり時間別では６１秒を越えるものはなかったが，最高は後半記録した５９．９秒であった。

(b)準決勝第二試合

表１に示すように３０分２６秒（総試合時間の３７．４％），前半１２分５秒（３０．１％），後半１８分２１秒（４４．６％）であった。１回当たりの時間は平均１４．４秒，前半２１２．５秒，後半１６．０秒であった。また，表２に示した様に時間別では，６１秒以上が０．８％となっているが，これは選手の怪我が１回記録されたことによるものである。

(c)決勝戦

表１のように５１分４３秒（総試合時間の４８．７％），前半２０分５４秒（５０．９％），後半１８分５４秒（４３．９％）。１回当たりの平均時間は１８．０秒で前半１６．９秒，後半２１．

表１．女子サッカーにおけるインプレー及びアウトオブプレーの時間の割合

区分		試合時間	インプレー 時間	インプレー %	インプレー 1回当時間	アウトオブプレー 時間	アウトオブプレー %	アウトオブプレー 1回当時間	アウトオブプレー 出現回数
準一	合計	82分01秒	47分38秒	58.1	25.3秒	34分23秒	41.9	18.3秒	[illegible]
	前半	40分16秒	24分07秒	59.9	27.3秒	16分09秒	40.1	18.3秒	[illegible]
	後半	41分45秒	23分31秒	56.3	23.5秒	18分14秒	43.7	18.2秒	[illegible]
準二	合計	81分22秒	50分56秒	62.6	24.1秒	30分26秒	37.4	14.4秒	[illegible]
	前半	40分11秒	28分06秒	69.9	29.1秒	12分05秒	30.1	12.5秒	[illegible]
	後半	41分11秒	22分50秒	55.4	19.9秒	18分21秒	44.6	16.0秒	[illegible]
決勝	合計	106分10秒	54分27秒	51.3	19.0秒	51分43秒	48.7	18.0秒	[illegible]
	前半	41分03秒	20分09秒	49.1	16.3秒	20分54秒	50.9	16.9秒	[illegible]
	後半	43分06秒	24分12秒	56.1	26.9秒	18分54秒	43.9	21.0秒	[illegible]
	延長前半	10分40秒	4分43秒	44.2	15.7秒	5分57秒	55.8	19.8秒	[illegible]
	延長後半	11分21秒	5分23秒	47.4	12.4秒	5分58秒	52.6	13.8秒	[illegible]

０秒，延長戦前半１９．８秒，延長戦後半１３．８秒であった。表２に示した時間別では６１秒以上が２回記録された。これも怪我と選手の交代であった。

４．アウトオブプレーの出現回数

表１でみるとおり，準決勝第一試合では試合全体を通して１１３回のアウトオブプレーが出現した。これは４３．５秒に１回の割合で試合が中断されたことになる。前半５３回，後半６０回で，特に後半は４１．８秒に一回の割合で試合が中断されたことになる。

準決勝第二試合では，試合全体を通して１２７回のアウトオブプレーが出現した。これは３８．４秒に１回の割合で試合が中断されたことになる。前半５８回，後半６９回で，特に後半は３５．８秒に一回の割合で試合が中断されたことになる。

決勝戦では，試合全体を通して１７２回のアウトオブプレーが出現した。これは３７．０秒に１回の割合で試合が中断されたことになる。前半９２回，後半８０回，延長戦前半１８回，延長戦後半２６回で，特に延長戦後半は２６．２秒に一回の割合で試合が中断されたことになる。

５．アウトオブプレーの出現原因

図１に示す様に，準決勝第一試合ではフィールド外にボールが出ることによるアウトオブプレー（スローイン，ゴールキック，コーナーキック）が，アウトオブプレー全体に当たる時間の７５．２％を占め，フィールド内でのアウトオブプレー（反則・不正行為，オフサイド，ゴールイン）は２４．７％であった。その内訳をみると，スローインが５６．６％（６４回），ゴールキックが１２．４％（１４回），コーナーキックが６．２％（７回），反則・不正行為が１５．０％（１７回），オフサイドが６．２％（７回），ゴールインが３．５％（４回）であった。

準決勝第二試合ではフィールド外にボールが出ることによるアウトオブプレーが７４．８％，フィールド内でのアウトオブプレーが２５．２％であった。その内訳は，スローインが５５．１％(７０回)，ゴールキックが９．４％(１２回)，コーナーキックが１０．２％（１３回），反則・不正行為が１９．７％（２５回），オフサイドが４．７％（６回），ゴールインが０．８％（１回）であった。

決勝戦ではフィールド外にボールが出ることによるアウトオブプレーが７７．３％，フィールド内でのアウトオブプレーが２２．７％であった。その内訳は，スローインが５８．７％（１０１回），ゴールキックが１１．０％（１９回），コーナーキックが７．６％（１３回），反則・不正行為が１７．４％（３０回），オフサイドが４．１％（７回），ゴールインが１．２％（２回）であった。

三試合を通してボールがタッチラインから出ることによるスローインがアウトオブプレー全体の５０％以上を占め，準決勝第一試合では７６．９秒に１回，準決勝第二試合では６９．７秒に１回，決勝戦では６３．１秒

表２．個々のインプレー・アウトオブプレー時間の割合（％）

一回当たりの時間	インプレー			アウトオブプレー		
	準一	準二	決勝	準一	準二	決勝
1～10	37.4	40.9	48.3	30.1	46.5	29.5
11～20	23.5	17.3	25.9	38.1	29.9	41.0
21～30	10.4	15.0	10.9	15.9	18.9	16.8
30秒以上	17.4	18.9	9.2	15.9	3.9	11.6
60秒以上	11.3	7.9	5.7	[illegible]	0.8	1.2

表３．アウトオブプレー出現原因のチーム別回数（回）

		スローイン		ＧＫ		ＣＫ		ＦＫ	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
準一	日産ＦＣ	14	17	5	3	0	0	7	4
	読売ベレ	17	16	1	5	3	4	5	8
準二	鈴与清水	21	15	0	6	1	5	8	9
	プリマ	17	17	2	4	2	5	7	6
決勝	鈴与清水	26	27	4	5	5	1	7	9
	読売ベレ	27	21	3	7	2	5	17	4

に一回の割合で行われたことになる。

6．チーム別アウトオブプレー出現原因回数

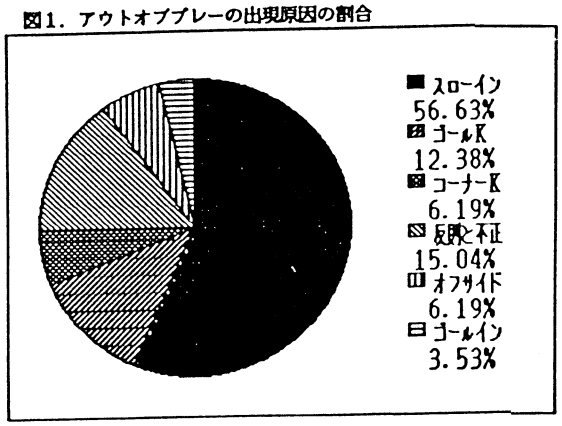
表3に示すように，アウトオブプレーの出現原因別の回数をチーム毎に分けてみた。その出現原因の内訳はスローイン，ゴールキック，コーナーキック，フリーキックの4種目でそれぞれ前・後半に分けた。

準決勝第一試合をみるとスローインは両チームともあまり差がなく，ゴールキックにおいては日産が前半多いのは読売のシュートの数が多かったためであり，後半は逆であった。コーナーキックは全部が読売のコーナーキックであり，ゴール前またはその近くでのプレーに対して日産が守り，読売が攻撃するパターンが多かったことがわかる。日産のコーナーキックが1回もないのは興味深いことである。またフリーキックをみると両チームともそう変わりがないが，前半読売の反則，後半は日産の反則が多かったことがわかる。結果は読売が前半1点，後半3点を得点した。

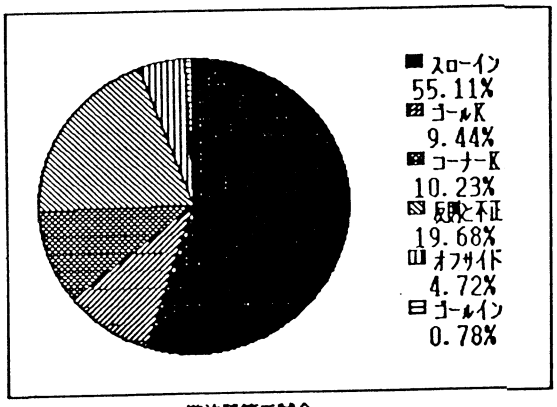
準決勝第二試合のスローインの回数は両チームほぼ同数であった。ゴールキックも前・後半通じて数こそ同じであったが鈴与のゴールキックが後半のみに集中しているのはプリマハムのシュートの回数が後半だけに偏ったということで，これは前半シュートに結びつくプレーがプリマハムには少なかったことが考えられ，，鈴与が有利に試合を展開したことがわかる。後半はプリマハムがやや優勢にゲームを進めている。コーナーキックが両チームともに後半多かったことは後半のはじめと終盤を鈴与，後半の中盤をプリマハムのペースで試合が運ばれた結果であった。フリーキックはほぼ同じであった。鈴与が後半1点を得点した。

決勝戦では，他の二試合に比べスローインの回数が両チームとも試合全体を通して多かったが，これはアウトオブプレー時間の占める割合が多かった原因である。コーナーキックの数は前・後半合わせて両チームほぼ同数であったが，後半読売のゴールキックが前半の倍以上であった。これは鈴与のペースで試合が進んでおり，鈴与は後半に得点しているのが理解できる。読売は前半得点し

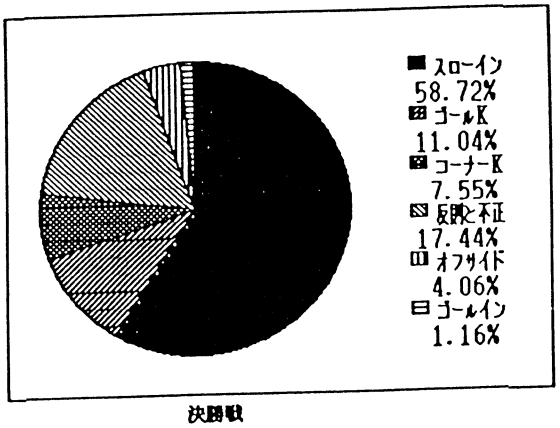
図1．アウトオブプレーの出現原因の割合



準決勝第一試合



準決勝第二試合



決勝戦

ており前・後半とも同じペースで攻撃しているのがわかる。コーナーキックは前半鈴与，後半読売が多くなり，これは回数の通り攻撃が多いことである。フリーキックは少し差が出ており，特に前半に読売に多いことは試合の中で鈴与の反則が多かったことで試合は読売ペースであったと言え，後半は鈴与のフリーキックが多いのは鈴与のペースとなり，同点とされて勝負に出た読売の試合運びに少し無理なところが出た結果であった。延長戦は両チーム，スローイン，フリーキックも同じで一進一退であった。読売が前半１点，後半鈴与が１点得点し，結果はＰＫ戦となり鈴与が優勝した。

Ⅳ．考　察

プレーの連続性が，現在求められているなかで女子の日本を代表するこの大会において最も高いレベルにあると言われている準決勝と決勝を分析してみた。準決勝二試合は約６０％がインプレーであったが，決勝戦は５０％程度であったということは試合時間の半分はプレーが止まっていることである。もちろんおもしろさという点において時間だけで判断するのは適当とはいえず技術・戦術等を総合的にみるのが妥当であるが，１回のインプレーの平均が三試合とも約２６秒以内であったことは興が殺がれるのも禁じ得ない。観戦する立場で言えば少しでも長く連続してプレーすることにより，観客を試合の中に引き込み１つ１つのプレーを見逃すことのできないようにグランド内に集中させることができるのではないだろうか。そうすることにより観客にも力が入り，選手達も場面場面でのギリギリのプレーが出来ると考えられる。技術的にもかなり向上しており今後も試合をスピードあるものにする為には，トラップ，キックなどの正確さ，更に戦術的にもますます高度化が要求されるが，これを１つ１つクリアーしていくことによってアウトオブプレーの要因を少しでも少なくしていくことが出来るのではないだろうか。またサッカー専用のグランドで行った試合でありながら結果はアウトオブプレーに半分の時間が費やされており，グランドの外に出たボールを早く処理する為に選手，その他関係者も対策を講じる必要がある。また今後は試合を演出していると言われている審判の対応の仕方についても考えていくことが大切な要因であると言える。

Ⅴ．まとめ

日本女子サッカーの試合におけるインプレー時間，アウトオブプレー時間とその要因について分析してみた。分析対象とした試合数が限られていて不十分な点も多いが，ある程度の傾向を把握できたと思う。この分析結果が今後のチーム作りや試合運びに反映されることを期待する。歴史の浅い女子サッカー界であるが，技術面・戦術面で磨きをかけ，ますます魅力あるものにしてゆくには今後とも多くの人達の指導が不可欠であることを記して終わりとする。

引用文献

1)松本光弘，森岡理右，山中邦夫，小野剛，菅野淳：サッカーの試合におけるアウトオブプレーに関する研究，第41回日本体育学会号，p732，1990

2)宮村茂紀，瀬戸進，小林久幸，瀬戸就一：大学女子サッカーの試合時間に対するアウトオブプレーの比率に関する研究，第11回サッカー医・科学研究会，1991

（平成４年１２月１０日受付）